

テレビュー福島

事業の名称

「テレビの未来を創る！～中学生の番組審議会体験～」

事業概要

放送法で設置が義務づけられ、番組の適正、質の向上を目指し議論が交わされる番組審議会。外部有識者による番組への意見や提言は放送局にとってとても貴重なものであり、放送局はこれを番組に活かすべく日夜務めている。今回は“模擬番組審議会”を中学校で開催し、参加体験を通じて中学生にテレビというメディアの存在意義と情報リテラシーを学んでもらった。

<参加者>

学校法人コングレガシオン・ド・ノートルダム桜の聖母学院中学校 全校生徒 29 名

<日 時>

2025 年 10 月 2 日（木）13：40～

<概 要>

①解説「番組審議会とは」

番組審議会担当役員から、放送局にとっての番組審議会設置の意義とその役割を分かりやすく解説した。

②講演「番組審議会の現場から」

当社の番組審議会委員長が、審議会の様子や、実際に出された意見や提言を紹介しながら、番組制作者に望むことから、放送局と番組審議会に関する総論までを話した。

③合評番組視聴

模擬番組審議会合評する番組として、2025 年 8 月 15 日放送の情報番組『ステップ』を視聴。番組の内容は、帰省に関するお土産事情に関するニュースや、戦時下の少女時代に風船爆弾の生産に携わった女性を取り上げた特集など。

④中学生による模擬番組審議会

4～6 人による計 6 グループに別れ、番組審議会委員になったと仮定して番組の感想や意見、提言を検討。グループの代表者が発表して、模擬審議を進めた。

これに対し、報道部長および番組審議会担当役員（報道制作部担当）が質問への回答や、意見・提言への感想を述べたり、番組への活かし方について説明したりした。

なお、番組審議会の様子をすべて収録し、後日編集を行った後にWEB上に公開した。

動画：<https://youtu.be/9WtafxJ9Yn0?si=kEU2YWH2qANnRAQL>



⑤番組審議会委員長による総括

最後に番組審議会委員長による総括として、「本物の委員に勝るとも劣らない鋭い視点や意見が数多く出されたことに感心した」と中学生の健闘を称えた。

事業の成果

今回、当企画に参加した中学生 29 名は、国語の授業でメディアリテラシーについて学んでいたことなどもあり、真摯にカリキュラムに取り組んだ。残念なことに、SNS に接する時間と比べ、テレビや新聞などのメディアに触れることが少ない生徒たちではあったが、各担当の話聞き漏らすまいと、とても熱心に耳を傾けメモを取っていた。

前半の解説と講演では、実際の番組審議会では、委員と放送局担当者との間で活発に、番組表現などをめぐって意見交換がなされている実態に触れてもらったほか、放送局にとって、委員が代表する視聴者の意見、目線がいかに重要であるかを知ってもらった。



また、実際の意見交換の内容説明を通じて、▽放送局が、うその情報を伝えてしまうことのないよう、報道に取り組んでいること、▽見た人に事実とは違う印象や誤解を与えてしまうことがないよう、表現や演出に配慮していること——などを学んでもらった。

後半の模擬番組審議会で印象的だったのは、中学生から出された意見に報道部長が「そのとおりだと思う。次回以降はいただいた意見を活かしていきたい」と答える場面が多かったことである。



今回は学校側の協力で、意見集約を授業における課題としていただいたことで、通り一遍ではない、深い考察のうえで出された意見が多かった。メディアリテラシーを意識し番組表現を考えていたと思う。

実際に、参加した生徒からは、

- ・ 番組を見る際、構成や制作意図、社会的な影響など、多角的な視点から考察することが重要だと思う。
- ・ メディアリテラシーに必要なことは、自分で真剣に考えること、自分なりの答えを持つこと。
- ・ メディアに触れる機会は SNS がほとんどで、テレビを見ることはなかったが、今後は今日聞いた話を念頭にじっくりニュースを見たいと思う。

——などの意見が出され、メディアリテラシーに関する意識の向上や、放送番組への関心の醸成につながっているようであった。

なお、メディアリテラシーとは異なるが、報道番組制作の裏話や苦労話に対する生徒たちの関心が高かった。特に、亡くなった方の人数についてはおよその数字ではなく具体的な数字で報道する、という報道部長の説明には、心を動かされた生徒が多かったようだった。

日常的にSNSに長時間触れ、SNSがなくてはならない存在にまでなっている。上記のとおり、生徒たちは、自分たちがほかのメディアにほとんど触れることがないことや、情報源が著しく偏っていることに気づき、同時に危機感を感じた様子であった。

テレビや新聞といったSNS以外のメディアにも積極的にリーチする大切さを感じたと話す生徒が相次いだ。きっかけさえあれば、こういった気づきは生まれるのだと思った。

以 上